



## 保育士不足、危機感つものる0歳児の保育

数年前までは待機児童問題が騒がれた。今はその数は全国ベースでは減少している。減少したのは施設が増えたからだ。その増加に反比例するかのよう保育士の志望者は減少している。現場は慢性的な人手不足に慣れてしまっているかのようだ。

出生率は減少しているにもかかわらず、低年齢児の待機児童数は増えている。0歳児から2歳児では87%と高い数値である。これは担当する保育士の不足が背景にある。保育士の有効求人倍率は2倍以上、即ち、職を求めている保育士一人に対して求人側は2件あるということ。それでも採用ができないのは社会福祉法人の構造的な問題が多すぎるからである。（低賃金、過重労働、責任の個人への転嫁と重責、職場環境等々）

2023年9月19日朝日新聞社説では、「現場の人手不足や子供の安全といった『保育の質』をめぐる課題の解決も急務だ。施設の量的な充足が進む反面、保育現場での重大事故は年々増えている」と記している。重大な事故とは死亡したり、治療期間が30日以上に及ぶ事故（睡眠時の呼吸停止、プールや水遊び中の溺水、給食中の誤嚥、遊具からの転倒等）成長ざかり、突発的な行動をとるのが低年齢児の特徴である。児童が保育士のちょっとした観察の間隙について事故は起こる。

この背景には諸問題があるが、緊急の課題は0歳時の保育士の不足である。「実態をはずれた職員配置の基準や慢性的な人手不足が事故の増加の背景にある」と前掲の朝日新聞も指摘している。

0歳児3人に1人の保育士がつくと決められている。この基準だけでも過酷な状態だといわれている。一口に0歳児と言っても生後2ヶ月の子もいる。生後2ヶ月と3ヶ月の乳児を面倒見るにはきめ細やかな配慮と俊敏な動きがいる。そんな現場を見た人は保育士を目指すことを諦めている。怖い職業とさえ言われ自分の使命感の弱さを嘆いている。

これはある県の社会福祉法人の0歳時受け入れの実例である。

今年の8月までは4人の0歳時を3年経験の保育士と4月に入社した新人の保育士の2人で担当していた。9月になると8人の0歳時を法人側は受け入れ、0歳児は12人となった。配置された人は上記2名のほかに2名分に相当するパート社員（複数名）これを主任と園長が補佐するという体制となった。法人はそのように説明していたが園長が支援することは初めからない。この法人では残業ゼロを命じており、（労働基準監督署の指導があったため

か?) 2人の正職員の勤務時間は8時45分から6時までと定められ、その後は原則現場から離れなくてはならない。実際は隠れ残業をしてパートを支援しているので、勤務は8時ごろまでになる。もちろん残業手当はつかないし労働基準監督署には改竄した書類が提出される。

複数のパートの入れ替えは頻繁で、その都度正職員が引き継がなければならない。もっと問題は早朝から8時45分までの預かり時間はパートのみで、また原則として、午後6時から8時まではパートのみの見守りである。どんな事故が起きても責任は現場の保育士にあるとされる。園長は謝るだけである。園長は法人が保護してくれるが、職員は保護されない。これは一般通例のことでこの独自の問題ではない。

この園の初任給は160,000円で、昇給は年1000円である。上記朝日新聞社説には、政府は「保育士の配置基準を手厚くする。施設の支援や保育士の処遇改善の検討を打ち出している」と記している。その実行は急がなければならないが、同時に行わなければならないのは、社会福祉法人全体の見直しである。単に人数合わせであれば、理事長の判断で上記のようにパートで回すこともできる。数合わせさえしていれば理事長の責任は問われない。

社会福祉という美名に隠れた理事長の独裁制が多いのが実態ではないか。理事、評議員の選出も理事長の息がかかったものが多い。ましてや監事に至ってはおやである。監事の報酬を公費で賄い、事実を明らかにする適切な監査を実施しない限り、本来の公共の福祉の使命は全うできないと私は思う。朝日新聞にもっと突っ込んだ論説と同時に実態調査を進めてほしい。社会福祉に就職を志す者は「優しさ」を持っている。何に対しても優しい。だから、自分が忍耐すればなんとかなると我慢して日々を過ごしている。利用者さんのことを考えて内部告発さえも恐れている。これは社会福祉法人全体の問題である。

65歳以上の人口が30%に近づき、80歳以上が10%を超えた人口構造になった我が国ではこれから益々高齢者福祉、障害者福祉のお世話になる人が増えてくる。保育士のみならず社会福祉に働く人は減少するばかりである。最低賃金の額さえ知らない社会福祉の経営者がいる。社会福祉では経営とは言わず運用という古い話が今も生きているかの如く、経営側は堅く法律に守られて利益を享受している。ベンツに乗っている理事長が何人いるか調査してみるのも意味があるかもしれない。(社会福祉の本来の使命感に燃えている理事長も沢山おられることは周知の通りであるし私もその方達を尊敬している。)

更に、社会福祉法人で働く人に賢くなってもらいたい。自信と誇りを持てるはずの職業であるにもかかわらず、あなた方の社会的地位は低すぎる。それに甘んじてはいけない。乳児の養育は誠に重要であることは福祉の基本である。「三つ子の魂百まで」は心理学的に証明された事実である。本来なら母親から離れたくない乳児を母親に代わって養育するその重責には然るべき待遇がなくてはならない。賃金だけではない。職場のコミュニケーションをはじめとする精神的な雰囲気や穏やかでない子供は安心してそこにいることができない。

人口が減少するから、尚更、人を大切に育てていかねばならない。養育には暖かい人間の手が欠かせない。AIには任せられない領域である。

同志の皆さんどうか声を大きくあげて社会福祉を健全に育てていこうではありませんか。

## パリ通信・第141号 2023年9月号

### 浮かぶアート

近年の異常気象は日本もフランスも顕著で、9月新学期が始まったパリに突然の猛暑がやって来た。8日からフランスでラグビー・ワールドカップが始まり、フランスも日本も第一戦を快勝し熱戦がまだまだ続きそうな暑い9月である。涼を求めてセーヌ川岸を散歩したり、カフェでおしゃべりしたり、夏の最後を楽しんでいる姿が珍しくない。



パリと言えばセーヌ川、昔からパリに物資を運んできたセーヌ川の役目は大きく、今日も朝早くにはコンテナを積載した大型運搬船が日常的に行き来している。観光船に乗る人は多くても近くまで行く用事のある人は少ない。船に住んでいる人もいるが、これからセーヌ川がクローズアップされるイベントが増えそうである。

来年2024年夏パリ・オリンピック・パラリンピック選手団入場行進が船に乗って行われる予定だ。パリ市内のインフラ工事と合わせて、セーヌ川岸の整備も急ピッチで進んでいる。浮かぶ避難所「ルイズ・カトリーヌ号」が係留されているオステルリッツ岸でもボートハウスの上下水道設置、処理を待つ下水を一時的に貯蔵する大型タンクの設置工事が行われている。



そこから上流に500m程遡ったベルシー橋の下に「浮かぶ写真アート船 (Quai de la Photo)」が先日オープンした。セーヌ川とアート、セーヌ川と住民、セーヌ川と日常をより密接に結びつけ、アートを身近に触れて、セーヌ川を楽しんでもらうというコンセプトである。セーヌ川に開かれた新しい船はガラスのオープンスペースで、船上の自由な空間を写真展、写真スタジオ、子どもたちのアトリエ、講演会、セミナー、ギャラリー、カフェレストラン、プライベート・レンタルスペースなど多目的な文化活動に使っている。

展覧会は入場無料で多くの人にアートに接してもらう。船の運営・維持費、繫留費用などの必要経費を捻出するために、岸や船内を利用したレストランやカフェ、ショップの運営、船の中に設けた小さな船着場から高級小型船でセーヌ川クルーズを提供するなど多岐に渡る収入源を確保している。12日夕刻から行われた船のオープニングではパリ市長アンヌ・イダルゴ、パリ13区区長ジェローム・クメを始め、パリ河川局などセーヌ川に関わる各機関からの挨拶があった。



この浮かぶアート船を建造し運営しているのは

「ARTFLUX(アートフリュックス)」というフランスの会社である。「Fluctuat nec

mergitur」(ラテン語で「波に打たれても沈まず」)はパリ市のスローガンであり、そこから社名を付けている。ARTFLUX社は4年前に同じコンセプトで「ストリート・アート」に捧げた船「フリュクチュアート」(FLUCTART)をオープンし所有している。ジャズ音楽船「大地の音(Son de la Terre)」(ノートルダム大聖堂の足元)、その隣の「ダフネ(Bateau Daphné)」号の所有者でもある。パリ市内だけで5隻、セーヌ川上に合計8隻を所有しているというから驚きで



ある。そして、この「ARTFLUX」社がル・コルビュジエ船「ルイズ・カトリーヌ号」に出資する話が進行中だ。2020年10月浮上したコンクリート船の修復工事は遅々として進まなかった。コロナ禍の真っ最中で日本は遠くなった。新しく造船する費用の3倍かかる修復工事費の目処は全く立たなかった。ウクライナ戦争で資材が急騰し、文化事業に寄付をしてくれる団体も現れなかった。建造から100年以上過ぎた歴史の証人を次の世代に引き継ぐことができれば嬉しい。

フランスには文化財が溢れており、どこも資金集めに苦労している。ル・コルビュジエの名前を謳っても多額の支援者には巡り会えなかった。ARTFLUXの出資が決まるにはまだ幾つかの条件をクリアしなければならないが、セーヌ川に浮かぶ船として再生の門出を迎えることができれば本当に嬉しい。

ノウハウを持った若い優秀な二人のフランス人起業家で立ち上げたARTFLUX社であるから、古い歴史の価値を現代の若い人たちに伝える活用をしてくれるに違いないと期待している。